

疎ませ、後退った。

「いや、心配ご無用、わたくしの馬は暴れたためしがありませんので」殿方は言った。

彼女が射疎められたようにたじろいだのは、そのせいではなく、何かしら——フローレンスにもはっきりとは言えなかったが——殿方自身から感じられるもののせいだった。

「憚りながら、ドンビー社長の令嬢かとお見受け致しましたが？」と殿方は有無を言わせぬ笑みを湛えて言った。フローレンスが頷くと、彼は続けた。「わたくしはカーカーと申します。恐らくは名前でしかご記憶ないかと存じますが、ええ、カーカーと申します」

フローレンスは——その日は暑かったが——妙な悪寒を覚え、バーネット卿夫妻に彼を紹介した。彼らはしごく丁寧に挨拶を返した。

「お邪魔を致し」とカーカー氏は言った。「誠に申し訳ございません！　がわたくし、明朝レミントンの社長の下へ参る予定に致しておりますので、もしやご令嬢から何かお言伝でも賜れば、如何ほど幸せかと存じまして」

バーネット卿は即座に、フローレンスが父上に一筆認めたいはずと見て取り、引き返そうと言い出し、カーカー氏にはそのお姿のまま拙宅へお越し願ひ、ディナーでもと誘った。

カーカー氏は残念ながらディナーの先約はあるが、ご令嬢が

一筆認めたいと申されるなら、喜んでお宅までお供致し、お気の済むまで何時間なりと待たせて頂きましょうと答えた。

彼が耳許まで達さんばかりの笑みを湛えてこう言い、馬の頭を叩いてやる格好をして彼女の方へ身を屈めた際、フローレンスは目が合い、相手がこう言うのが聞こえた、というより見えた。「船からは何の音沙汰もありませんぞ！」

戸惑い、怯え、身を疎め、彼がそんな言葉を口にしたかさえ定かでなく——というのも、それを声にする代わり、笑みを通して、何かしら徒ならぬやり方で見せつけたような気がしたからだ——フローレンスはやつとの思いで、せっかくですが結構です、何もお伝えすることはございませんので、と答えた。

「わたくしから一言お伝え致すことも、お嬢様？」と齒男。

「ええ」とフローレンス。「ただ——ただ、愛する娘がよろしく申していたとでも——もしよろしければ」

フローレンスは取り乱してはいたが、仮に彼が彼女と父親の間ではどんな言伝も無用だが、それほどぞぐわぬ言伝もないと知っているなら——見るからに蓋し、そんな風だったから——どうか容赦してほしいと請うかのような面持ちで殿方の顔を目を上げた。カーカー氏は微笑み、深々と頭を下げ、バーネット卿からは、くれぐれも拙者と愚妻が宜しく申していたとお伝え願えませんかなとの言伝を託されると、暇乞い



カーカー氏、フローレンスとスケトルズ一家に自己紹介

をし、立ち去った。かの奇特な夫妻に好ましい印象だけを残して。フロレンスは彼の去り際にも激しい悪寒に見舞われたため、バーネット卿は俚諺に鑑み、誰かがお嬢さんの墓の上を歩いておるのかもしれないぞとひやかした。カーカー氏はその刹那、角を曲がり、振り返り、腰を屈め、姿を消した。さながら、では早速そうさせて頂きましょう、と墓地へ直行したかのように。

第二十五章 ソルおじきの妙な報せ

カトル船長は物臭な方ではなかったが、店のウィンドーから、ソル・ギルズが茶の間で海軍士官候補生を勘定台に据え、琢磨塾生ロブにはその下で寝仕度をさせたなり、せつせと書き物をしているのを見届けた翌朝、ベッドで片肘突いてむっくり起き上がり、小さな部屋を眺め渡した際に時計が六時を打たぬほど早くは起き出さなかった。船長の目は、もしや彼がいつも目覚めると同時にその朝醒つたほど大きく瞳らされるところしたら、苛酷な任務を強いられていたに違いない。またもしや彼が大概その半分でもゴシゴシやるとすれば、その勤務にずい分手荒な報いしか受けていなかったことになる。だが、今朝はまた格別であった。というのも、琢磨塾生ロブが、確かについぞカトル船長の寝室の入口に立ったためしがないのが、正しくそこに、如何にも「起き抜け」の、火照った、クシヤクシヤの形をし、船長の方へ大きく息をはずませながら突っ立っていたからだ。おかげで真っ紅な、凄まじい形相をして。

「おいや！」と船長はだみ声を上げた。「こりやまたいったい何事じゃい？」

ロブがモゴモゴと一言も返さぬ内に、カトル船長はどうど起き出し、少年の口を塞いだ。

「ようそろ、坊主！」と船長。「まだ口をきくでない！」

船長は客をびっくり仰天して見つけていたが、この指令を下すと、そつと彼の肩に手を掛けたまま隣の部屋に押し込め、しばらく姿を消していたと思うと、すぐさまブルーの上下に身を固めて戻って来た。指令は依然有効なりとの合図に片手を上げながら、カトル船長は食器戸棚へ向かい、酒を一口注ぎ、使者にも同上を振舞った。船長はそれから、今しも伝えられんとする怪情報にぶちのめされては大変とばかり、ひたと壁を背にして部屋の隅に立つと、使者に目を据えたなり、御尊顔を能う限り蒼白にし、酒を一気に呷って、やおら口を開いた。「進めい！」

「つて、しゃべれつてえこつてすかい、船長？」とは、かのような予防措置に大いに感じ入っていたロブ。

「いかにものー！」と船長。

「つてつても、だんな」とロブ。「別にたいしたこたねえんすが。ただこいつを見て下せえ！」

ロブは鍵束を引っ張り出した。船長はそれを眺め、隅を固守し、使者を眺めた。

「で、こつちも！」とロブは続けた。

少年は封のしである包みを取り出したが、それをカトル船長は鍵をマジマジ見つめたままにマジマジ見つめた。

「おい、けさ目えさましてみたら、船長」とロブ。「つて、五時を十五分ばかりしまわってやしたが、枕もとにこいつらがあつたもんで。で、店のドアは門から錠からすっぽんぼんで、おまけにだんなまで消えちまつてるんで」

「消えちまつた！」と船長は腹の底から。

「ドロンぱつてなもんで、だんな」とロブは返して。

船長の声がそれは途轍もないところへもつて、御当人、部屋の隅からそれはとんでもない行きあしをつけて飛び出して来たものだから、ロブは轢き殺されてはたまらぬと、鍵と包み突き出したなり、別の隅に飛び退いた。

「カトル船長へ」つて、だんな」とロブは声を上げ。「鍵に、それと包みにも書いてありやす。けど、ほんとのこと、船長、おい、それっぽつちしか知んねえんで。マジ、こつからさき！ けど、やつとこさ食いぶちにありついた小僧に、こいつはたいそな食いぶぢやねえすか」とは悲運の琢磨塾生、袖口を目玉に振じ込みながら。「小僧のだんなと来た日にゃ小僧のクチまでかつさらつて姿あ晦まして、んで小僧はそいつで大目玉あ食らうなんてよ！」

との愁嘆はカトル船長の凝視、というより睨めつけを指し